

所皆然り、此辺り路傍に蹲居して見る者我が封境に倍す。葛木村に到る、途中に於て内藤能登守政義の使者を見る。大小姓之に接し其名を称す。将に小池原村の近く祇園社あり。幾通往きて拜し暫し休憩す。…略…道市村を経て将に楠木生村に向う。鶴（三羽也）昂然麦田に立つ。即ち隼を放ち羽を掲げて之を攫む前の如し、双鶴忽然還り来って之を救い将に飛び去らんとす。鷹匠をして大鷹を放たしむ。羽を揚げて之をつかむと前の如し亦之を救う。隼亦之を追うも及ばず、遂に空高く舞上りて逸す。…略…

時に日西山に傾く。乃ち行列を整え、行伍嚴然として乱れず、臼杵に帰城す。持帰る所の鳥惣計七十六。

（内鶴二羽、山鳥二羽、鴨六羽等等他に小鳥三十九羽）

以上は、臼杵五万石第十三代稲葉幾通公の天保十一年（一八四〇）の御巡見の模様を僅かに紹介したものである。先に紹介した文化二年（一八〇五）佐伯藩の場合と随分と隊伍の人数が違うようであるが、禄高も臼杵藩は二倍半であるばかりでなく、何より三十五年後の天保の頃は時代の安定性があると思う。

それにしても、鷹狩の模様や、僅かな家来と民家を廻ることや、他領内通過の有様が記されて貴重なものである。

増村隆也先生の佐伯郷土史後編（封内巡視と大庄屋）を更に併読いただければ幸であります。

故宮博物院

台北市の中心部から八キロの地、外双溪の山麓に北京故宮博物院と南京中央博物院に収蔵されていた中国歴代王朝の秘蔵していた、中国最高の美術工芸品などを展示した故宮博物院があり、またの名を中山博物院ともいう。

殷代から清代までの六十二万点余の宝物は、世界三大文明の発祥地にふさわしく、ただただ驚くばかり。しかも、あの五千年の戦火をくぐりぬけたものと思えば、中国の指導者といひ従事者といひ、中国人の歴史・祖先に対する尊崇の念の厚さと、文化財愛護の執念の現われと言えるようだ。もって学ぶべきだと思つた。